

2026年2月7日配布

第381回山口西田読書会（=2026年1月24日開催分）のprotocols

唐露記

1、テキスト

「知るもの」「三」の第6段落343頁7行目「それで変ずるものを考へるには」から344頁10行目まで。

2、キーセンテンス

「時は数学的連続から変ずるものに至る限界をなすのである、両者の中間に位するものである。」(344頁8行目)

「真に変ずるものに至っては、性質的なるものが主語的となり形式的なるものが述語的とならねばならぬ」(344頁4～5行目)

3、問い

西田は、「変ずるもの」という個物的・流動的な具体存在を、我々がどう「考え」語りうるかを問う。彼は、これを固定的な「形式的時」（数学的連続）では捉えられないとし、「時」をそれ自体が「数学的連続から変ずるものに至る限界」として再定義する。つまり、「変ずるもの」そのものと思惟とを結ぶ、動的な「時の形式」によってのみ「変ずるもの」を語り得るのだと説く。この「時」という形式において初めて、「変ずるもの」そのもの（例：読書会という個物）が主語となり、「〇時に起こった」という「形式的なるもの」が従う述語となる。これが、直観される「変ずるもの」そのものを概念的思考へと媒介する西田独特な仕組みである。

では、存在そのものの意味は、必ずこの「限界」としての「時」、つまり<流れる思惟形式>を通してしか我々に現れないと言えるのか。この形式を離れた存在の直接的顕現は、原理的に不可能なのか。